

パプアニューギニア、トーライ社会における 貝貨タブをめぐる現在の状況

深田淳太郎*

要旨

パプアニューギニア、トーライ社会ではタブと呼ばれる貝殻の貨幣が、婚資の支払いや儀礼における威信財といったいわゆる伝統的な用途にだけでなく、モノの売買を媒介する交換媒体としても今日に至るまで使用されてきた。さらに近年では、州政府がタブを法定通貨を補完する第二の通貨として公認しようとする動向もある。一方で、トーライの人々はパプアニューギニアではもっとも早くから貨幣経済に接触してきた人々であり、彼らの日常的な経済生活における中心的な交換媒体は法定通貨キナである。本稿では、この二つの貨幣が交換媒体として共存している現在のトーライ社会において、貝貨タブはいかなる形で使用されているのか、そしてこの二つの貨幣がどのように相互に関係しているのかについて、フィールドワークで収集した具体的なデータをもとに論じる。

キーワード： 「原始貨幣」、法定通貨、補完貨幣化、パプアニューギニア

目次

はじめに

トーライ社会におけるタブ使用の概観

- 1 トーライの人々
- 2 タブの物質的特性
- 3 トーライ社会におけるタブの循環

交換媒体としてのタブとキナの関係

- 1 歴史的経緯
- 2 近年におけるタブとキナの互換的な使用の試み
- 3 批判的見解と今後の見通し

おわりに

はじめに

パプアニューギニア、イーストニューブリテン州政府は現在、法定通貨キナ *kina* を補完

* 一橋大学大学院社会学研究科博士課程

する第二の通貨としてタブ *tabu* と呼ばれる貝殻の貨幣を使用するプロジェクトを推進している。すでに州内の多くの地域政府¹では人頭税や各種のライセンスの料金、裁判の際の罰金などを、またいくつかの公立学校では授業料を、タブで支払えるようになっている。

タブは、イーストニューブリテン州において人口のマジョリティを占めているトーライと呼ばれる人々が伝統的に使用してきた貝貨である。トーライはタブを婚資や賠償の支払いとして、葬式などの諸儀礼において展示、分配、交換する威信財として、またさまざまなモノの売買を媒介する交換媒体としてなど、広汎な用途に使用してきた。世界各地のいわゆる「原始貨幣」の中で、タブは特にその交換媒体としての汎用性においてよく知られている[Douglas 1967, Einzig 1966]。西洋社会との接触以降、非西洋社会における「原始貨幣」の多くは、その交換媒体としての地位を国家の法定通貨に取って代わられてきたが、タブはトーライ社会において今日に至るまで交換媒体としての機能を保ちつづけている。

とはいえ、このことはパプアニューギニアの法定通貨であるキナがトーライ社会においては交換媒体として使用されていないということは意味しない。むしろ、トーライの人々の日常的な経済生活において中心的な交換媒体として使用されているのはキナである。今日、町の商店やマーケットにおいてタブが交換媒体として用いられることはほとんどない。しかしながらトーライの人々は、タブはあらゆるモノを購入することが可能であると主張する。そして実際に村の生活で、タブはさまざまな取引において交換媒体として使用されている。

本稿はフィールドワーク²で得たデータおよびいくつかの文献資料をもとにして、この貝貨タブがトーライ社会においてどのように使用されており、また法定通貨キナとどのように相互に関係しているのか、その実態の粗描を試みるものである。

トーライ社会におけるタブ使用の概観

1 トーライの人々

トーライはパプアニューギニア、ニューブリテン島イーストニューブリテン州のガゼル半島北東部に居住しているオーストロネシア系のクアヌア語を話す人々である。人口は約14万人、同州の人口の60%強を占めるマジョリティである。また小規模な民族集団が大半を占めているパプアニューギニアでは、国全体で見てもトーライはかなり大規模な民族集団の一つである。

¹ 行政単位“Local Level Government”を指す。イーストニューブリテン州における州政府以下の行政単位は、州政府 Provincial Government - 地方政府 District Government - 地域政府 Local Level Government - 村 Ward である。

² 本稿で使用する資料は2002年10-12月、2003年6月-2004年2月、2004年6月-2005年1月の3回、計18ヶ月間にわたるフィールドワークにおいて収集したものである。以上の調査は平成14-16年度文科省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)および2003年度富士ゼロックス小林フェローシップ助成を受けて実施された。

ガゼル半島の北端に位置するラバウルは、19世紀後半からのドイツによるビスマルク諸島一帯に対する植民地支配において、政治的・経済的な中心地として機能してきた。当時からラバウルの近郊ではココナツのプランテーションが盛んにおこなわれ、トーライはそれらのプランテーションで働き、また自らもココナツを栽培するなどして、パプアニューギニアの中ではもっとも早い時期から資本主義市場経済・貨幣経済に接触してきた。ココナツ、カカオなどの商品作物の栽培は今日に至るまでトーライの人々にとって中心的な貨幣獲得のための手段であり続けている。ヨーロッパ人との接触が比較的早かったことと、この豊かな収入源のために、トーライは現在に至るまで、パプアニューギニア国内だけではなく、メラネシア地域全体でも「もっとも豊かで、教育程度の高い」人々であるとみなされてきた[Errington and Gewerts 1995: 56]。

また同時にトーライはパプアニューギニアの中でも、もっとも強く自らの伝統文化を保持している民族集団の一つである。トーライが自らの伝統文化を象徴する代表的な二つのものとして挙げるのが、トゥブアン *tubuan* と呼ばれる仮面と、この貝貨タブである。彼らは自らの伝統文化を特徴づけるこの貝貨を、葬式儀礼や婚資の支払いといったいわゆる伝統的な用途に用いるだけではなく、モノの売買の際の交換媒体として国家の法定通貨であるキナと並行して使用してきた。

2 タブの物質的特性

タブはムシロガイ³という直径 1 cm、高さ 8 mmほどの小さな巻き貝を加工して作られる。この巻き貝の上部を切り落として中心に穴を開け、その穴に木の繊維で作った紐を通して数珠状につなぎあわせたものがタブである。原材料であるムシロガイは少なくとも 19 世紀末以降、トーライの居住地の近辺にはほとんど生息しておらず、基本的には外部で獲得されて持ち込まれるものだった。輸入元は時代によって異なるが⁴、現在では主に隣国であるソロモン諸島から輸入されている。

交通機関が発達していなかった頃には、ムシロガイは、時間をかけ、危険を冒して遠方まで赴き、獲得してくる、まさに希少な財であった[Salisbury 1970: 282-283]。現在では交通機関も発達し、また他部族の支配する地域に行くことに伴う危険も大幅に減少している。

³ 本稿で「ムシロガイ」と表記する貝は、ムシロガイ科 *nassariidae* に属する巻き貝の一種を指す。この貝の名称は Epstein, A. L. [1963]では“*nassa immersa*”、また DeMeulenaere[2002]では“*nassa callosa*”、あるいは“*nassa camelus*”と表記されており、その学名は明確に同定されていない。インターネット上の貝を専門に扱ったサイト (URL: <http://www.bigai.ne.jp/> や URL: <http://www.gastropods.com/index.html> など) で情報を収集した結果、ムシロガイ科の貝について書かれた文献[Cernohorsky 1984]に、この貝が学名“*Nassarius (Plicarcularia) camelus*”として掲載されているとの情報を得た。しかし本稿執筆の段階ではこの情報の真否の確認はとれていない。今後、専門家に助言を求めるとして学名を同定するつもりである。

⁴ 一定期間以上たつと、その土地のムシロガイを取り尽くしてしまい、そのたびに新しい生産地にかわっていくのだ、という説明がなされることが多い。

しかし必要となる交通費や人件費、時間を考えると、現在もムシロガイを獲得するには大変なコストが伴う。実際、輸入されてくるムシロガイの価格は、それを原料として作られたタブが持つ価値（キナでの価格）と比べても決して安くない⁵。ムシロガイを加工してタブを作成する作業は非常に根気を要するものの、基本的には特に困難な技術を必要とはしない。また特別な資格や権威がなければタブを作ってはならないという決まりもない。つまり原料のムシロガイさえ手に入れば、誰でもいくらでもタブを作ることができるのである。こういった状況下で、タブがインフレを起こさずに、その価値を保っているひとつの要因が、原料のムシロガイの希少性にあるということは今日においても言えそうである。

トーライがタブを使用、計量する際にもっとも頻繁に用いる単位はポコノ *pokono* である。この単位は別名でファゾム（英語の *fathom*、日本語で言えば「尋」）と呼ばれることからわかるように、両手を広げたときの左右の手の間の幅で計量される。長さにするとおよそ 180cm である⁶。このポコノは、たとえば人頭税は 1 ポコノ、イニシエーションで支払う額は 2 ポコノというように、タブの量に言及する際に基本的に用いる単位である。

長くつなぎ合わせたタブを分割して小さな単位で使用すること、短いタブをつなぎ合わせて大きい単位で使用することはいずれも可能である。1 ポコノよりも小さい単位としては 1/2 ポコノの長さの 1 パパール *papr*、1/4 ポコノの 1 トウラマリクン *tulamalikun* などがある。これらの短い単位のタブは、指先から手首まで、あるいは肘までといった身体の一部を使って計量する場合もあれば、単に目分量で計量する場合もある。ポコノよりも大きな単位としては 10 ポコノのことを 1 アリップ *arip* と呼ぶ。ある程度まとまった量のタブを運ぶときには、この 1 アリップで束ねることが多い⁷。

タブは長さだけでなく、貝殻の数でも計量される。その場合には貝殻 1 個分のタブは 1 パラタブ *palatabu* と呼ばれる。タブの量を貝殻の個数で言及するのは、主に商品を買収する際に小さな単位のタブを扱う場合においてである。例えば、商品 A は 40 パラタ

⁵ ムシロガイは 330ml の缶一杯の価格がだいたい 20 キナ程度である。この缶一杯のムシロガイから作られるタブはだいたい 5 ポコノ分であるという。つまり 20 キナ分のムシロガイが、5 ポコノ分のタブになるということである。1 ポコノ = 4 - 5 キナという現在の標準的な交換レートからすると、5 ポコノのタブは 20 - 25 キナ分の価値をもつと考えられる。木の繊維のコストや作成にかかる時間、人件費を考えれば、原料のムシロガイを買って、それをタブに加工して売っても、その差額から得られる利益はさして大きなものにはならない。

⁶ ただし、1 ポコノ = 180 cm のタブをメジャーなどを使って計量することはほとんど無い。税金の支払いや交換所での交換などの比較的厳密な計量が求められるような場においても、基本的にタブの計量は腕を用いておこなう。

⁷ これらのさまざまな単位の呼称は、トーライ社会の内部でも地域によってさまざまに異なる。さらにそれぞれの単位で表されるタブは、その長さや含まれる貝殻の数に関する厳密な決まりやチェックがあるわけではなく、したがって同じ単位とされるタブでも質や量においてかなりのばらつきがある。例えば 1980 年代にガゼル半島に調査に入った Neumann[1992: 184]によると、1 ポコノに含まれる貝殻の数は、同じ村の中でも 320 - 350 個程度でばらつきがあったという。

ブだ、という形で価格が提示される。しかし通常、買い手は木の繊維から外してバラバラにした貝殻ではなく、短めの紐状のタブを用いて、この40パラタブ分の支払いをおこなう。また場合によってはタブはバラバラの貝殻の状態扱われることもある。この場合は通常瓶に詰められて、交換や支払いに用いられ、330ml 前後の容量の缶や瓶一本分の貝殻が5ポコノであるとされる。さらに別の形態としては、少なくとも100ポコノ、多いときには1000ポコノ以上のタブを車輪状に束ねて作るロロイ *loloi* と呼ばれる形態も存在する。

3 トーライ社会におけるタブの循環

さまざまな形態・単位のタブは、そのときどきの場面に応じて使い分けられる。本節ではタブがそれぞれの形態、単位において用いられる場面を記述することを通して、トーライ社会においてタブが循環する様子を概観する。

タブの使用をもっとも日常的に見ることができるのは、村落での小さな取引においてである。前述したように、町の大規模なマーケットや商店においてタブで商品を売買することは現在ではほとんどないが、村落のレベルではさまざまな取引においてタブを使用する。たとえば道端の露天でピンロウや落花生などを売買する際には、しばしば支払いにタブを用いる。また村にある個人経営の商店では、米や缶詰などの町で購入されたさまざまな商品はキナだけではなく、タブで売られることがある。また商店ではなく、個人でタバコなどの商品を購入して日常的に携帯し、周囲の人々にタブで売っている姿もよく見られる。

こうした取引ではタブは主に短く切り離された形態で使用され、パパール(1/2ポコノ)やトゥラマリケン(1/4ポコノ)といった小さな単位、あるいは貝殻の数を表すパラタブといった単位で計量される。

また個人間のちょっとしたやりとりにタブを使用することもある。しばらく雨が降らずに自分の家の水が無くなってしまい、やむなく近所の子のタンクから水を汲ませてもらうときなどに、そのお礼として小さな単位のタブを渡すという場合である。こういった「ちょっとしたお礼」として、渡されたタブの長さについて言及されたり計量されたりということは通常はないが、やはりここで用いられるのも主には短い単位のタブである。

個人間の取引においてのみならず、既に触れたように、税金や各種のライセンス料、裁判の賠償金、罰金などの支払いにもタブは用いられる。現在ではトーライの居住地域の大半では人頭税をタブで支払うことができる。また役所での決済はキナでおこなうため、タブで支払われた税金はキナに換えられなければならない。そのため役所ではタブが入ってくるとすぐにキナで売り出すのだが、これは常にすぐに売りきれてしまうという。

以上のような村の中での小さな規模の取引や役所への税金などの支払いといった場面における使用が、タブの主要な循環ルートのひとつである。しかしタブは、こういった小さい単位でモノの売買などに使用されてトーライ社会を循環しているだけではない。トーライの人々は、ある程度の量のタブが集まると、それを長くつなぎ合わせて貯蔵し、もうひ

とつ別の循環ルートでの使用に備えるのである。

こうして貯蔵されたタブが使用される代表的な機会のひとつが婚資の支払いである。トーライでは、婚姻を成立させる手続きとして夫側の親族集団から妻側の親族集団⁸への婚資の支払いが必要とされている。この婚資の内容として期待されているのがタブである。婚資として支払われるタブの額は、女性の教育程度や居住している地域⁹など、それぞれのケースによって異なってくる。想定されている額は少ない場合でも 100 ポコノ、場合によっては 800 ポコノを超える場合もあり、概して非常に高額である。

一方でトーライの人々は、これらの直接的な対価の支払いにタブを用いるだけではない。それ以上に彼らが熱心に望んでいるのは、貯蔵した大量のタブでロロイを作ることである。トーライ社会においてはロロイを持つこと、それも大量のタブを束ねた大きなロロイを持つことは、即ち強い社会的な影響力を持っているということを意味する。トーライ社会においてロロイが高い社会的価値を付与されていることの背後には、ロロイが帯びている強い神秘的な力があると考えられる。かつては、その力の強さのために女性はロロイを扱うことができず、またロロイが貯蔵されている小屋に立ち入ることも禁じられていたという [Salisbury 1970: 278-179]。またロロイは、その神秘的な力の強さゆえに切ることが危険であると考えられていたため、切る人は誰であれ強力な保護の呪術を身につけることが必要とされていた [Epstein, A. L. 1969: 233]。

前述したようにロロイは大量のタブを車輪状に束ねて作られるものである。物理的にいえばロロイは単なる大量のタブに過ぎないが、実際にロロイに加工されるとタブはそれまでとはまったく異なった使用方法、用途、社会的意味を持つようになる¹⁰。それまで日常的な取引における交換媒体として使用されてきたタブは、ロロイになると家の中や専用の貯蔵室に大切にしまいこまれるようになり、再び日常的な交換媒体として使用するために切り離され、外に出されるということは基本的に無くなる¹¹。

ロロイが外に出され、使用されるのは限られた機会においてのみである。もっともよくロロイが使用されるのは、葬式儀礼においてである。大きな葬式儀礼の際にはタブは、ミナマール *minamar* という竹で組まれた台に展示され、また短く切り離されて死者のため

⁸ トーライの社会構成原理において基本となる単位は、ヴナタライ *vunatarai* と呼ばれる母系親族集団である。土地などの財産は基本的にこのヴナタライの内部において相続される。

⁹ 婚資の額に関してはしばしば揉め事が起こり、裁判に持ち込まれることもまれではない。そのため、多くの地域政府はその場合の判決の基準となる婚資の最高額を定めている。その額が各地域政府によって 150 ポコノから 300 ポコノまでと倍近くの開きがあることから、婚資の額が地域ごとに異なっていることは推測できる。

¹⁰ 交換媒体として使用されるタブがロロイになることによって使用方法や意味を変えるということについては別稿 [深田 2002] で詳しく論じた。

¹¹ Salisbury [1970: 297] の民族誌には、いったん束ねて作り上げた「ロロイをバラバラにするのは究極の恥である」という記述がある。

のダンスの踊り手に対する謝礼として支払われ、儀礼の参加者に分配される¹²。これらのタブの使用は死者の親族の義務であり、人々に大きな出費を強いるものである¹³。しかしその半面で、大きな口ロイを飾り付けたミナマルを出したり、気前良く大量のタブを参加者に配ったりすることはその人物の社会的な権威を誇示し、また強化するものとなる。

またこの葬式におけるもっとも重要なテーマは、死者が一生かけて貯蔵してきたタブが切られ、参加者へ分配されることである。葬式で切るための十分なタブを残せずに死んだ人間は怠け者であったと評される、ということはしばしば言われることである。トーライの人々がタブを貯蔵し口ロイを持ちたいと願う大きな理由のひとつとして、この自分の葬式でのタブの使用がある。

このように葬式儀礼は、タブを使用することで社会的権威を誇示する競争の場であり、また死者が一生をかけて貯めてきたタブを生者に受け渡すトーライの社会秩序の再生産において重要な意味を持つ場でもある。ここで主催者側から大量に分配されたタブを受け取った参加者は、このタブを家に持ち帰り、自らの、あるいは親族の婚資として、あるいは葬式において将来的に使用するために貯め込む。しかし中には、儀礼の会場でタブを受け取ると、すぐにその場の露天で売られているスナック菓子やアイスといった商品を購入するのに使用する人もいる。葬式儀礼はタブを持たない人にとってはタブを獲得するチャンスであり、同時に現金収入のない人にとっては分配されたタブでちょっとした娯楽商品を買うチャンスなのである。葬式などの儀礼の会場では、たくさんの人が町でちょっとした商品を買ってきて、それをタブで売っている。近年、日常的な交換の場でタブが使用されるケースが減ってきている中で¹⁴、大量のタブが確実に出回る葬式などの儀礼は、タブを獲得する良い機会なのである。実際に、現在のトーライ社会でもっとも盛んにタブで商品が売買されるのは、この儀礼の会場における小商業においてである。

このように口ロイに加工されたり、あるいは貯蔵庫に貯め込まれたりしている大きな単位のタブと、日常的に交換媒体として使用されている小さい単位でのタブは、その形態、

¹² これらの儀礼におけるタブの使い方はトーライの中でも地域によって大きく異なってくる。例えば私が調査の基盤をおいた村の周辺では、ミナマイ *minamai* と呼ばれる葬式儀礼において、会場に口ロイを飾りつけ、あらかじめ家で口ロイを1アリップ単位のタブに切り、それを会場に持ってきて分配する。しかし他の地域では会場に口ロイを飾りつけない場合もあり、また会場に口ロイを丸ごと持ってきて、その場で切り離して分配するところもある。ただいずれのケースでも口ロイが何らかの形で参加者に見せられているという点は共通している。

¹³ タブだけでなくキナでも相当の出費が必要となる。例えば、2003年に私が居住する村で開催された葬式儀礼において、死者の近しい親族でありその儀礼を主催した人物は、その一日の儀礼のために現金を1200キナ、タブを150ポコノ使ったという。

¹⁴ イーストニューブリテン州の推計によると、トーライ社会に存在しているすべてのタブの3/4が口ロイの形態で貯蔵されており、残りの1/4が表に出て流通しているのだという。[Post Courier 1999a]。また1960年代に調査を行なったSalisburyの推計においても全てのタブのうちの3/4は口ロイの形で貯蔵されており、残りが流通しているとされている [Salisbury 1966: 116]。ただしSalisbury自身はこの数字には±25%程度の誤差があると言っている。

付与されている社会的な意味などがさまざまに異なっている。また使用される場面や、その方法、用途においても異なっているため、それぞれの循環のルートは切り離され別々に存在しているように見えるが、実際には一つのものとして連結されている。トーライの人々は日常的な売買などを通して、社会を循環している小さい単位のタブを獲得し、それを大量に貯蔵してロロイに加工する。ロロイに加工されたタブは、直接的にはモノの売買などの日常的な循環に戻らないが、しかし婚資の支払いや儀礼の際の分配などの限定された機会において再び切り離され、バラバラにされて人々の手に渡る。そして人々は、この受け取ったタブを再び日常生活において使用する。ロロイに加工されることで、日常的な売買を通じた社会における循環から切り離され、退蔵されたタブは、特別な機会に切り離され、バラバラにされることで、再び日常生活の売買に使用される交換媒体に戻るのである¹⁵。

交換媒体としてのタブとキナの関係

1 歴史的経緯

本節ではタブとキナの関係について、特にタブの交換媒体としての側面に注目して、19世紀末のヨーロッパ社会との接触以降、現在に至るまでの経時的変化を概観する。

かつてトーライ社会では市場などで売買されている全てのモノ、またトーライ人の提供する全てのサービスを、タブとの交換で手に入れることが可能であった。19世紀末の宣教師は「タブはこの地域の"national currency"である」[Danks 1888: 307]、「全ての商品のマーケットにおける価値はタブで表わされる」[Parkinson 1887: 121]という記述を残している。実際、接触の初期の段階では、両者の間の取引におけるタブの交換媒体としての力はドイツの法定通貨であるマルクと同等かそれ以上のものであったようである。19世紀末から20世紀の初期にかけて、トーライの人々はコプラに対する支払いとしてマルクやその他の取引品ではなくタブを要求したという記述もある[Kleintitschen 1906: 95]。また植民地統治政府は「19世紀の間は、種々の罰金をタブで支払わせており、1896年の歳入には923ポコノのタブも含まれていた」という[Einzig 1966: 75]。

¹⁵ ブロックとパリーの分析枠組み[Block and Parry 1986]を用いれば、日常的なモノの売買における小さな単位のタブの循環を短期的なサイクル short-term cycle、ロロイに加工されてからの婚資や葬式での使用を長期的なサイクル long-term cycle と整理できるかもしれない。この分析枠組みでは、この二つの秩序は相反するものではなく、相互補完的に関係しあって取引秩序全体を構成するものとされている。タブの循環においても小さい単位のタブの循環と大きな単位のタブの循環は決して対立しておらず、互いに関係し合っている。したがって彼らの分析枠組みは、タブの循環をかなりの程度的確に説明することを可能にする。しかしこの分析枠組みを採用することは、本稿では見送りたい。理由は二点ある。一点は、彼らの分析枠組みが当該社会における取引秩序全体を対象にしたものであるのに対して、ここで私はトーライ社会における取引秩序全体ではなく、タブの循環だけを便宜的に抜き出して説明しているということである。もう一点は、トーライの人々自身は、小さな単位のタブの使用と大きな単位でのタブの使用を、短期的な秩序と長期的な秩序というように分けては説明しないということである。ブロックとパリーの分析枠組みの有効性と問題点についてはまた別稿で詳しく論じたい。

しかし同時にトーライの人々は、商品作物の生産などを通じて早い時期からグローバルな資本主義市場経済の影響を強く受けていた。特に 20 世紀に入り、トーライの人々の生活における法定通貨への依存の度合はだんだんと高くなってきたようである。1929 年の世界恐慌によって主要な現金収入源であったコブラの価格が大暴落し、トーライの経済は大きな打撃を受けたという記述が、いくつかの文献で見られる[Epstein, A. L. 1969, Salisbury 1970]。これらの記述からは、この時代にすでにトーライの人々の生活はグローバルな規模で展開する資本主義市場経済と密接に結びついており、法定通貨が深く浸透していたことを読み取ることができる。

1950 - 70 年代にかけて複数の人類学者がトーライ社会に調査に入ったが、彼等は「マーケットにおける全ての商品の価値はタブとドルの両方で提示されている」[Epstein, T. S. 1968: 23]、「旅行者がマーケットにおいてドルで買うのと同じ商品をトーライの人々はタブで購入する」[Epstein, A. L. 1979: 158]などと報告しており、当時タブはラバウルなどの大規模なマーケットにおいても交換媒体として使用されていた様子がうかがえる¹⁶。

1980 年代に入ると、タブがラバウルなどの町の大きなマーケットで使用される機会はかなり減少してくる。そして現在、私が 2002 - 2005 年の間にイーストニューブリテン州に滞在し、観察した中では、町のマーケットや商店などの商品売買の場でタブが交換媒体として支払われているのを見たことはない。

このように 19 世紀後半のヨーロッパ人との接触以来、タブが日常的なモノの売買において交換媒体として使用される頻度はだんだんと下がってきているといえる。このことにはいくつかの要因が考えられる。もちろん複数の要因が組み合わさってこういった状況が生じたのだろうが、ここでは、ヒトやモノの地球規模での移動という字義どおりの意味でのグローバルイゼーションという言葉がひとつの説明のキーワードになるだろう。

ラバウルなどの町では、商店の経営者の多くはオーストラリア系の華僑を中心とする外国人であり、またマーケットにもパプアニューギニア中から多くの非トーライ人が集まっている。彼らは基本的にはタブを受け取っても使い途がなく、したがって商品に対するタブでの支払いを受け付けない。また特に外国人の経営する商店には、キナでのみ購入可能な多種多様な魅力的な商品　米やコーヒー、コーラなどの食料品から、シャツなどの衣料品、音楽テープやラジカセなどの娯楽用品、嗜好品など　が並んでおり、これらの商品は現在トーライの人々の生活に深く浸透している¹⁷。このような外部社会からのヒト、モ

¹⁶ 一方で 1960 年代の早い時期からすでにラバウル等の大規模なマーケットでの主要な交換媒体は法定通貨であった、と話す人も少なくない。過去に「実際に何があったのか」を突き止める、あるいは決定することはきわめて困難である。

¹⁷ たとえば米はパプアニューギニアではほとんど生産されておらず、その大半はオーストラリアからの輸入品である。しかしトーライの人々は非常に米食を好み、現在では日常的な食生活の一部となっている。またある種の儀礼においては米の食事を参加者にふるまうことが慣例になっているということからも、この輸入食品がトーライ社会に深く浸透していることが分かる。

ノの流入は、トーライの人々の生活のあり方を大きく変え、日常生活におけるキナへの依存度を上げている。その結果、キナを手に入れるためにトーライ人同士の間の取引においてもキナが用いられるようになってきている。

しかし、このように事実としてタブの交換媒体としての使用機会が減ってきている一方で、多くのトーライの人々は「タブこそがわれわれの真の貨幣であり、現在でも強い力を持っている」と言う。これはタブが葬式などの儀礼で欠くべからざるものとして使用され、特別な力を持つということを主張しているという側面ももちろんあるだろうが、決してそれだけのものではない。トーライの人々にとってタブは交換媒体としても依然「強い」力を持ち続けているのである。その「強さ」としては以下のようなことが挙げられる。

ひとつには近年の政府主導のタブの補完貨幣化の動きがある。多くの地域政府では税金や各種ライセンスの料金をタブで支払えるようになり、またいくつかの学校では授業料をタブで支払えるようになってきている。かつてキナでしか支払えなかったモノをタブでも支払えるようになったことは、タブが「強く」なったことに他ならない。またタブはキナとの関係においても「強さ」を増している。1994年の変動為替制への切り替え以降、キナの価値は下落を続けており、パプアニューギニアは常時インフレ状態にある¹⁸。つまりキナの購買力が落ちているわけだが、これに対して村におけるタブの購買力は基本的には下がっておらず安定した力を持ちつづけていると人々は言う。タブがキナに比して「強い」力を保っているということは、タブとキナの交換レートを見ても明らかである。1988年には1ポコノ=2キナだったのが、1998年には1ポコノ=3.5キナ、2002年には1ポコノ=4-5キナにまで上がっている¹⁹。

また、タブの価値はキナとの比較において上がっているだけではなく、近年ではタブ自体の希少性が高まったために上がったとも言われる。このことは、モノの売買における主要な交換媒体がキナになったことでタブが日常的な交換の場に出てくる機会が減ったために、タブを獲得するチャンス自体が希少になっていることから説明されることが多い。

2 近年におけるタブとキナの互換的な使用の試み

前述したように、現在イーストニューブリテン州政府はキナを補完する第二の通貨としてタブを活用するプロジェクトを推進している。本節ではこの政府によるプロジェクトを中心に、タブとキナの互換的な使用をめぐる近年の状況について概観する。

1990年代に入り、それまではキナでのみ支払いが可能になっていた人頭税を、いくつか

¹⁸ パプアニューギニアの統計局が発行している資料によれば、ラバウルの物価指数(1977年を100とする)は1994年9月255.9だったが、2003年9月には737.8にまで上がっている[Papua New Guinea National Statistical Office 1997, 2003]。

¹⁹ タブの価格上昇は、原料であるムシロガイを獲得し、運搬するための費用がインフレに伴い上昇したためということからも説明される。

の地域政府ではタブで支払えるようになった²⁰。このことについては、いつからはじまったかなどを記録した政府の資料を見つけることはできなかったが、フィールドワーク中に地域政府関係者を含む多くの人々がそう話すのを耳にした。またいくつかの文献にも同様の記述を見ることができる[Errington and Gewertz 1995: 60, 小坂 2002: 32]。

2005年1月に、イーストニューブリテン州の9つの地域政府²¹においてインタビューを実施したところ、そのうちの8つの地域政府では人頭税をタブで支払うことを公に認可していた²²。また、ラバウルディストリクト管内のパラナタマン地域政府の2001年の納税記録²³を調べたところ、その年に人頭税を納めた1,205名のうちの523名(全体の43%)がタブを用いて支払いをおこなっていた。これらのことから、現在トーライが居住している地域の大半では人頭税をタブで支払うことが可能になっており、実際にその制度はよく利用されていることがわかる。タブとキナの互換的な使用の促進は政府側からの一方的な押し付けには終わっておらず、人々もそれを受け容れていると言える。

表1：パラナタマン地域政府における人頭税の二つの支払い手段の件数

	キナのみでの支払い	タブを用いた支払い ²⁴	全支払い件数
男性納税者	322	220	542
女性納税者	360	303	663
全納税者数	682	523	1205

また現在の州政府によるタブの補完貨幣化プロジェクトに大きな影響を与えているのが、1992 - 94年にラバウルの町で業務を展開した貝貨銀行である。これは元州議会議員のヘン

²⁰ 人頭税は地域政府の収入であり、その額や徴収の方法、そしてタブでの支払いの可否を決定するのは各地域政府である。しかし実際に税金の徴収を行うのは村レベルにおいてであり、地域政府レベルでタブでの支払いが認められる前から、タブで人頭税を支払うことができたという話も多く聞いた。この場合は村レベルの徴収時にタブでの支払いを受け付け、その場ですぐにそのタブがキナで売られ、結果としてすべての税金はキナの形で地域政府へ集められる。

²¹ イーストニューブリテン州は4つのディストリクトからなっており、トーライはこのうちの3つにおいてマジョリティである。私がインタビューを実施したのは、この3つのディストリクトの管内に全部で12ある地域政府の中の9つにおいてである。残りの3つの地域政府でのインタビューを実施していないのは、地理的・時間的な制約からである。

²² 私がインタビューで訪問した中で、唯一、人頭税をタブで支払うことを認めていなかったのはラバウル都市地域政府であった。この地域政府はその名のとおり、ラバウルの町を中心とした地域を治めている。市長代行は、タブでの支払いを認めない理由として、ラバウルの町には外国人やパプアニューギニアの他の州からの出身者が多数居住しており、タブでの支払いを認めることは彼らの利便をはかることにはつながらないから、と説明してくれた。

²³ 多くの場合、役所の納税記録にはキナでの金額が書かれているだけで、その税金がタブで支払われたのかキナで支払われたのかを判別することはできない。しかしパラナタマン地域政府の役所では、キナとタブのどちらで支払いがなされたのかが記録された資料を、2001年納税分に限り、見つけることができた。

²⁴ この項目「タブを用いた支払い」には、人頭税の全額をタブのみで支払っている場合と、タブとキナの両方を用いて支払っている場合の二つの支払い方法が含まれている。

リ・トクバク Henry ToKubak 氏が運営していたもので、その事業内容は「伝統的貨幣(タブ)を対象に銀行業務を行う事業」[小坂 2003: 2]と登録されていた。この貝貨銀行は政府から銀行としての認可を受けていたわけではないが、実際に「貝貨預金」、「貝貨を担保としたキナの貸付」、「キナと貝貨の交換」、「貝貨の材料販売」、「貝貨の制作代行」の五つの業務をおこなっていた[小坂 2003: 2]。しかしこの貝貨銀行は 1994 年のタブルブル山の噴火²⁵の影響で資産の大半を失い、業務を停止せざるをえなくなった。その後は現在まで元の形態での業務は再開されていない。

こういった状況の中で、イーストニューブリテン州では 1999 年に「伝統的財の振興と流動化 Promotion and Mobilization of Customs Wealth²⁶」と題した計画が提出された。州議会はこれを承認し、州内においてタブをキナと並行して第二の法定通貨として使用していく方針を決定した[Post Courier 1999a, 1999b]。当時の州副知事レオ・ディオ Leon Dion 氏²⁷は、この計画書を提出した背景のひとつとして、近年のキナの価値下落とそれに伴うインフレーションを挙げ、「物価の上昇によりモノを購入するための十分な金を稼ぐことが難しくなっており、そのため州内では人々が伝統的通貨をモノの購入に使用できるように許可するべきである」[The Independent 2000]と述べている。この段階ではタブを流通させる具体的な政策は決定されていないが、ひとつの留意点として、タブを流通させるためには厳密に規格化する必要が主張されている。前述したとおり、タブは一単位に含まれている貝殻の数や長さが非常に曖昧である。そこで、このようなばらつきを是正し、また具体的な流通の方策を検討するための調査が計画された。

この調査は 2001 年に実施された。調査は入札にかけられ、オーストラリアのコンサルティング会社が落札した²⁸。この調査では、タブを「地域通貨」²⁹の一種として捉えるアプローチがとられている。2002 年にはこの調査の報告書が州政府に提出されているのだが、この報告書は部外秘になっているので、残念ながらここで資料として用いることはできない。

²⁵ 1994 年 9 月 19 日、ラバウル近郊の二つの火山(タブルブル山、バルカン山)が噴火した。この噴火の影響で 11 万人以上の人々が避難した[Post Courier 2004]。大量の火山灰の影響でラバウルの町の多くの建造物は倒壊し、州都も南東に 30 キロほど離れたココポに移された。

²⁶ この「伝統的財」にはタブだけでなく、同州内の他の部族が伝統的に使用してきたカカル *kakal* とミス *mis* と呼ばれる貝貨も含まれている。しかし現状では、タブに補完貨幣化に対して払われているほどの政策的努力が、他の「伝統的財」に払われているとは言い難い。

²⁷ レオ・ディオ氏は 2002 年からは州知事に就任している。

²⁸ この調査に関わったスティーブン・ディミレネー Stephen DeMeulenaere 氏は [Appropriate-Economics.org](http://www.appropriate-economics.org) のコーディネーターとして活動している人物で、そのウェブサイト“Local Exchange Systems in Asia, Africa and Latin America” [URL: <http://www.appropriate-economics.org/>]において、タブについての情報をまとめている [DeMeulenaere 1995-2002]。

²⁹ さまざまなタイプの地域通貨が存在するが、基本的に共通している点として、近代貨幣では手が回らない個別地域内における様々な資源(特に金銭的評価に馴染みにくい人的資源など)の流通を地域通貨(補完貨幣)を利用することによって活性化することを目指している点が挙げられる。

その代わりに、この 2001 年の調査を受けて 2003 年に計画された第二段階の調査の入札の際に提示された調査事項書[East New Britain Provincial Administration 2003]に書かれている内容から、2001 年の第一段階の調査の結果、そして第二段階の調査の見通しを簡単に紹介する。

州政府は第一段階の調査を「タブの流動化によってもたらされる文化的経済的な利益とリスク、さらにはタブの所有者によるタブの経済的、伝統的、文化的価値についての認識を提示した」ものであると評価し、この報告を受け、「タブは補完貨幣として効果的に機能しうる」という基本的な見解を提示している。そして、この補完貨幣化によって「タブは伝統的な生活の方法で生きていきたいと願っている人々、そして貨幣経済により深く関わっていききたいという人の双方に実現可能な代替手段を提供」し、政府は「十分な追加的な歳入を得ることができ」、また「タブは若い世代をトーライの文化へと編入していくことへの動機付けとして機能しうる」としている。このように第一段階の調査の結果を受けて、州政府は、タブの補完貨幣化をおこなうことには社会的、経済的、文化的な面において明らかなメリットがある、としている。そして、つづく第二段階の調査においては、さらに具体的な「タブの規格策定と流通促進の方策」を決定することを目指している。この第二段階の調査は、前述したように 2003 年に入札にかけられたが、入札してきた業者の質や州政府の予算難などの問題のため 2005 年 1 月の時点ではまだ実施に移されていない。

このプロジェクト以外にも、タブとキナの互換的な使用はさまざまな形で推進されている。2002 年には州政府は学校の授業料をタブで支払えるようにする方針を発表し[Post Courier 2002]、また同年タブとキナの交換業務をおこなう民間の交換所「バラナタマン・タブ交換所 Balanataman Tabu Exchange」が、ラバウルディストリクト管内のバラナタマン地域政府のバックアップを受けて立ち上げられている³⁰ [Post Courier 2002b]。

現在では、前述のもの以外にも民間のタブとキナの交換サービスが運営されている。葬式儀礼や婚資の支払いに際して、手持ちのタブが不足している人のために、知り合いがタブを融通しその対価をキナで受け取るということは昔からおこなわれていたが、タブをキナに替えるサービスが提供されるようになったのはごく近年のことである。例えば元国会議員のナキクス・コウガ Nakikus Konga 氏は、顧客が持ち込んだタブを 10 ポコノ = 40 キナで買い上げ、タブを必要としている顧客には 10 ポコノ = 50 キナで売っている。彼の交換サービスの知名度はまだ高いものではないが、人々は儀礼の際に必要なタブを手に入れるために、あるいは逆に学校の授業料を支払うためのキナを工面するために彼のサービスを利用している。彼の交換所の出納帳によれば、2003 年 10 月から 2004 年 11 月の約一年間で、のべ 257 人がこの交換サービスを利用している。合計すると 3570 ポコノ

³⁰ ただし翌 2003 年には、すでにこの交換所におけるタブとキナの交換サービスは中止されており、2005 年 1 月の時点では再開されていない。

分のタブを 13,920 キナで買い取り、2,400 ポコノ分のタブを 12,000 キナで売っている。この一年間の利用の数字だけから、このサービスが人々の生活に浸透している度合や今後の見通しを判断してしまうのは早計であろう。しかしながら、この交換サービスを利用している人が一定数存在しており、少なくともその利用者にとってはこのサービスが有益であり、利用価値があるものであると認識されているということは言えるだろう。

以上見てきたようにタブとキナの互換的な使用は 1990 年代以降、州政府などの政府機関を中心に、さまざまなレベルにおいて推進されてきている。またこの動向に対する人々の反応も、私がフィールドワーク中に見聞した情報を総合すると、概ね好意的である。

だが今のところ、まだいくつかの問題点 例えばタブの長さや貝殻の数などにおける規制の欠如などが解決されてはならず、また使用できる範囲も政府に対する支払いが中心で、包括的なものであるとは言い難い。州政府は、タブとキナの互換的使用およびタブの補完貨幣化はさまざまな面において効果的に機能するという見解を示しているが、今後この動向が人々の生活にどのような影響を与えるのか（あるいは与えないのか）はまだまだ予断を許さない段階である。また必ずしもすべてのトーライが諸手をあげてこの政策に賛成しているというわけではない。

次節では、州政府がタブの補完貨幣化によってもたらされるだろうと見ている文化的、社会的、経済的な諸側面における影響について、トーライの人々自身による代表的な批判的見解を紹介し、最後に私自身が感じる問題点、および今後の見通しを提示したい。

3 批判的見解と今後の見通し

2002 年の Radio Australia の記事によると、パプアニューギニアの National Cultural Commission の Executive Director であるジェイコブ・シメット Jacob Simet 氏はタブの補完貨幣化に慎重な姿勢を示している。彼は「(イーストニューブリテン州のおこなう)調査は何世紀も昔から持続的におこなわれている慣習の文化的な価値が、今後ずっと衰退しないでいけるのかどうかについても考慮すべき」であるとし、またタブは「強い儀礼的、宗教的な価値を持ち、そしてキナに対するオルタナティブとしては機能しえない」と結論づけている[Radio Australia 2002. ただし()内は著者による補足]。

また 2002 年に実施したインタビューにおいて、ある人物³¹は、私とその年に開設された前述のバラナタマン・タブ交換所について質問すると、それは良くないことであると明確に否定し、また州政府によるタブの補完貨幣化についても反対の意を示した。彼はトーライの伝統文化であるタブと法定通貨であるキナは明確に区別すべきであり、この両者を混同することは誤ったことであるという意見を持っていた。

³¹ この質問とそれに対する回答からは、政治的な意図を読み取られてしまう可能性が少なからずあるため、ここではこの人物の名前は伏せることにする。

ここで挙げた二人の人物の主張において共通していることは、タブのキナとの互換的な使用がトーライの伝統文化とは相容れないという点である。この見解は、州政府による見解　タブを補完貨幣化し、より広い範囲での流通を促進することはトーライの伝統文化の強化につながる　とは明確な対照をなす。伝統的に使用してきた貝貨を、昔からの適切なやり方を守って使用することが伝統文化を守ることになるのか、それともより活発に流通させることが伝統文化を強化していくことにつながるのか。そもそも、どのようなやり方がタブの適切な使用方法であるかを確定しえない以上、このいずれか一方の立場が他方に比べてより適切であるとは容易に言えるものではない。

次に、州政府の政策においてもっとも重要であると思われる、タブの補完貨幣化が本当にタブの流動化につながるのかという点について検討してみたい。州政府はタブを補完貨幣化することは、文化的な側面のみならず、社会的、経済的な側面においても意義深い成果をもたらすとしている。前述したように、州政府の推計によれば、現在タブはその全体の3/4がロロイ等の形態で退蔵されており、残りの1/4のみが流通しているとされている。この退蔵されているタブを流通の場面に引っ張り出し、その流動性を高めることは、経済的な側面での狙い　第二の通貨としてタブを活発に流通させることでキャッシュフローの総量を増やし、経済活動を刺激する　においても、社会的な側面における狙い　タブとキナの互換的な使用を推進することで、タブ保持者とキナ保持者の両者にさまざまな社会的な状況に対応するオルタナティブを与える　においても不可欠の条件となる。果たして、補完貨幣化することによってタブの流動性は本当に高まるのだろうか。

結論から先に言ってしまうと、具体的な補完貨幣化の方策が定まっていない現在の状況では、この問題に対してははっきりとした見通しを立てることは不可能である。流動化する可能性もあれば、しない可能性もある。私自身はこの政策に対して賛成・反対いずれの立場に立つつもりもないので、ここでは両方の考えられる可能性を検討してみたい。

最初に流動化しない可能性から見ていこう。まず確認しておくべきは、多くのトーライが言うように、州政府がこの政策を打ち出す以前からタブはあらゆるモノを買うことができる交換媒体であったということである。つまり、政府がそれを公認するかどうかによらず、タブは潜在的にキナと同様の力を持っていた。ただし、このタブが潜在的に持つキナと同様の交換媒体としての力は、これまで必ずしも全面的には顕在化されてこなかった。短い単位のタブはモノの売買に使用されていたが、貯蔵されている長い単位のタブやロロイが日常的なモノの売買に使用されることはなかったのである。その結果として、タブ全体の3/4は日常的な流通の場面に出ることなく退蔵されていた。今回の政策は、このタブが潜在的に持っていたキナと同様の交換媒体としての力を、州政府が公に認めることで顕在化し、退蔵されているタブを流通の場に引っ張り出してくることを狙ったものである。

一見すると理にかなっているようにも思えるが、しかしこの政策は重要な点を見落としている。問題はタブが退蔵されている、その理由にある。なぜトーライの人々はタブを直

接的な交換に使用せずに、退蔵し口ロイに加工するのか。タブが十分な交換媒体としての能力を欠いているからだろうか。もしこの理由が正しいならば、交換媒体としての価値を公認することによって、退蔵されていたタブは交換媒体として流通の場に出てくるだろう。しかし、おそらくはタブが退蔵されている最大の理由はそこにはない。最初に確認したようにタブは公認されようとされまいと、あらゆるものを購入する能力を持つ交換媒体なのである。トーライの人々が大量のタブを貯め込み、それを束ねた口ロイを使わずに大切に退蔵しているのは、章の 3 節で述べたように、それがキナを保持し、使用することとは明らかに異なった社会的な意味を持っているからである。だとするならば、補完貨幣化でタブの潜在的な力を顕在化することによって、タブを貯蔵庫の中から流通の場に引っ張り出すという州政府の狙いは、必ずしも思いどおりにはいかないだろう。

次に、補完貨幣化によってタブが流動化する可能性を検討しよう。上ではトーライ社会においてタブを所有することの意味から考えたが、この問題はトーライの人々のキナに対する需要という面からも見ていく必要がある。前節で見たように、人頭税のタブでの支払いは広く受け容れられており、実際に半分近くの人がこの制度を利用している。この事実が意味していることは、キナよりもタブでの支払いの方が都合がよい、あるいはキナは持っていないがタブなら持っているという人が少なからずいるということである。

2000 年のセンサス[Papua New Guinea National Statistical Office 2002]によると、イーストニューブリテン州に居住する 15 歳以上の男女 124,269 人のうち、何らかの形でキナでの収入を得られるのは 42,537 人と、およそ全体の 1/3 である。このうちで賃金労働者は 17,906 人、残りは商品作物の栽培や漁業などから収入を得る自営業者である。安定してキナの収入を得ている賃金労働者は全体の 15% にすぎない。商品作物の栽培は、中には大規模な投資をおこなって大きな利益を得ている人々もいるが、こういった投資が可能な人はほんの一部であるということ、そして季節毎の買い取りの価格が大きく変動することから、やはりキナでの収入は安定しているとは言い難い。そして残りの 2/3 の人々、つまり大半のトーライの人々は基本的にはキナでの収入を持たないということになる。

一般的に言って、州都のココポやラバウルなどの一部の町をのぞいた村落部の住民は、日々の食料の多くを家族や親族の中で自給できるため、彼らにとって村の生活においてキナは絶対に必要なものではない。しかし、金や授業料の支払い、あるいは缶詰や米、服などをかうためには、やはりキナはどうしても生活上必要となってくる。こういうことを考えると、安定したキナでの収入を持たない人々にとっては、これまでキナしか使えなかった局面においてタブを使えるようにするという州政府の政策は非常に有益なものである。

前述したコウガ氏の交換所の記録を見ると、こうした生活上の必要からなされたと思われる少額のタブからキナへの交換が取引の大半を占めていることが分かる。全取引 257 件のうち、タブをキナに交換する取引が 219 件と全体の 85% である。さらにこの中で、交換の最小単位である 10 ポコノのタブを 40 キナの現金に交換する取引が 138 件と、実に取引

全体の 54%を占めているのである。これらの件数の絶対数の多寡は判断しかねるが、しかしタブとキナの交換サービスに対する需要の中において、こうしたタブからキナへの少額の交換が大きな部分を占めているということは、今後のタブとキナの互換的な使用の展開を見ていく上で興味深い事実である。タブとキナの互換的な使用の促進、そしてタブの補完貨幣化は、州政府の言うとおり人々の生活を助けうるのである。

表 2：コウガ氏の交換所におけるタブ取引量毎の取引件数

取扱量（ポコノ）	10	20	30	40	50～99	100～	
タブからキナへ（件数）	138	45	22	11	3	0	219
キナからタブへ（件数）	10	7	3	1	6	11	38
計（件数）							257

一方でこの数字はもうひとつ興味深いことを示唆している。全体の取引の 85%がタブからキナへの交換であるということは、逆に言えば、このタブをキナに替えた人々のうちの多くは、この交換所において再びタブを取り戻せていないということである。キナは持っていないがタブなら持っている人々としてこの少額のタブをキナに交換する人々を想定したが、彼らにしても無尽蔵にタブを持っているわけではない。彼らはこの交換によってタブを失うのである。では彼らが交換所に持ち込んだタブは、誰が買うのか。表 2 のキナからタブへの取引の覧を見ると、10、20 ポコノの少額の取引だけでなく 50 ポコノ以上、あるいは 100 ポコノ以上の取引がかなり多いということが分かる。キナからタブへの交換の全件数 38 件のうち 21 件が 150 キナ（30 ポコノ）を超える大きな額の取引である。中には 1,000 キナ（200 ポコノ）、あるいは 2,500 キナ（500 ポコノ）という大口の取引も含まれている。これらの多額のキナを必要とする取引を、キナでの安定した収入を持たない人がおこなったとは考えにくい。おそらくは政府の要人や、あるいは大きなビジネスや大規模なプランテーションの経営者といった、キナを大量に持つ人物が、葬式儀礼で使用するために購入したのだろう。ここからはタブとキナの交換サービス、ひいてはタブとキナの互換的な使用の推進に対するもうひとつの需要が見えてくる。キナ経済において豊かな人々が、葬式などの伝統的な儀礼において使用する大量のタブを入手するためにこのサービスを利用するのである。

このようにタブとキナの互換的な使用の推進に対する二つの需要　キナを持たない人々が、生活の必要上からタブをキナに替えるということと、キナを持つ人が社会的な権力を強めるためにキナでタブを購入すること　を見ると、州政府が言うように、タブの補完貨幣化はタブの流動性を高め、そして「伝統的な生活の方法で生きていきたいと願っている人々、そして貨幣経済により深く関わっていききたいという人の双方に実現可能な代替手段を提供」するのかもしれない。しかしその一方で見逃してはならないのが、キナ経済において豊かな者がさらにタブにおいても富み、キナを持たない者がさらにタブも失っ

ていくという、極端な社会の二極化につながっていく可能性である。

以上、ここまで見てきたように、補完貨幣化することによってタブは流動化する可能性もあるし、流動化しない可能性もある。州政府の見通しにおいては、タブの補完貨幣化は文化的、経済的、社会的なそれぞれの側面において有意義であるとされているが、それらはいずれも補完貨幣化することによってタブの流動性がより高まるということを前提している。それゆえ、この流動性が高まるのかどうかという問題は、今後のタブをめぐる状況を見ていく上でひとつの大きなポイントとなってくる。さらに、文化的な側面からの批判的な見解、および先に指摘した社会の二極化の可能性において見たように、仮に州政府が意図するとおりタブの流動性が高まったとしても、そのことがもたらす影響が必ずしもトーライの人々にとって好ましいものであるとは限らないということも忘れてはならない。

おわりに

本稿では、現在のトーライ社会における貝貨タブの使用の具体的な状況、さらに法定通貨であるキナとの関係について概観してきた。タブは婚資の支払いや、儀礼において展示、分配、交換されるなど、いわゆる伝統的な目的で使用されるのと同時に、日常的なちょっとしたモノの売買などにおける交換媒体としても用いられている。またタブは口ロイに加工されると神聖な価値を帯び、トーライ社会の秩序において特別な意味を持つようになる。そして今日、特に注目されるのがタブの交換媒体としての側面である。法定通貨キナとタブの互換的な使用がさまざまな形で推進されており、その中には州政府によるタブの補完貨幣化のプロジェクトもある。これらの動向は現在では、トーライの人々には概ね好意的に受け容れられている。しかし具体的な規制をどうするのか、あるいは本当にタブの流動性が高まるのか、などのいくつかの問題も残されており、どういった方向へ進んでいくかは未だ予断を許さない状況にある。

最後に今後の研究における問題意識と方向性を確認して本稿を閉じたい。トーライ社会におけるタブのような非西洋社会の「原始貨幣」が、西洋社会と接触し、資本主義市場経済の浸透が進んだ後にも国家の法定通貨と並行して使用され、さらには法律で規定された通貨としての地位を得ようとしているケースは、あまり他に例を見ないものである。またこの動向は、現在世界中で見られる地域通貨（補完通貨）プロジェクトの文脈から見ても珍しい例である。多くの地域通貨が、その理念には多くの賛同を得ながらも、実際にはあまり活発に使用されているとは言い難い[湖中 2005] のに対して、トーライ社会におけるタブの使用頻度は非常に高いものである。タブは法定通貨と並行して現在も交換媒体として使用され続けている数少ない「原始貨幣」であり、かつ世界中でもっともよく使用されて

いる地域通貨のひとつなのである³²。

このようなタブの貨幣としての、ある意味で特殊なあり方を見ると、不可避免的にひとつの問いが浮かんでくるだろう。なぜ、いかにして、この一周辺社会における貝殻の貨幣が、交換媒体として法定通貨と共存することが可能になっているのか。この問いは、トーライ社会という極めて特殊な一社会において発せられるものであるが、しかし同時にグローバルな規模で拡大する資本主義市場経済の影響下に否応なく置かれる現在の各ローカル社会について研究する人類学にとって、そしてそのうちのローカル社会に生きるわれわれにとって非常に興味深い問いである。この問いに答えていくことが今後の研究の大きな課題になってくるだろう。

参照文献

Cernohorsky, W.O.

1984 *Systematics of the Family Nassariidae (Mollusca: Gastropoda)*. Bulletin of the Auckland Institute and Museum No. 14.

Danks, Benjamin

1888 On the Shell Money of New Britain. *Journal of the Royal Anthropology Institute of Great Britain and Ireland* 17: 305-318.

Dominguez, Virginia

1990 Representing Value and the Value of Representation: A Different Look at Money. *Cultural Anthropology* 5(1): 16-44.

Douglas, Mary

1967 Primitive Rationing: A Study in Controlled Exchange. In *Themes in Economic*

³² 湖中[2005]は、地域通貨が「近代市場経済の物量主義的な価値観」によらない「オルタナティブな経済の仕組みを樹立」を目指している以上、「使用頻度や使用枚数」といった換算可能な尺度によってその評価をすることは妥当ではなく、「『地域通貨はなぜ使われないか』という問いは、近代市場経済が、それとは異質な地域固有の経済論理を土壌として動きだそうとしている地域通貨を、自らの論理に取り込もうとする際に発せられる丸め込みの問いに他ならないのである」と論じる[湖中 2005: 54]。それに対して、ここで私はタブを「もっともよく使用されている」と評し、またタブの法定通貨化においては流動性が高まるかが重要な問題であると見ている。私がそこを問題とするのは、イーストニューブリテン州が意図するタブの法定通貨化は、そうすることでタブがよりよく使用されることを狙っているものに他ならないからである。湖中は、地域通貨は近代市場経済への対抗、オルタナティブから「異質な地域固有の経済論理」へと向かう動きであるとしている。それに対してタブは「異質な地域固有の経済論理」をまさに体現するものであり、タブの補充貨幣化はその「異質な論理」から、対抗あるいはオルタナティブへの動きと考えることができるだろう。近代市場経済のオルタナティブとして想定されているのであるから、当然どれだけ使われるかが問題にされるのである。「異質な地域固有の経済論理」と近代市場経済のオルタナティブ、そして法定通貨と地域通貨と「原始貨幣」がどのような関係にあるのかという問題は、今後考えていくべき重要な課題である。

Anthropology. Raymond Firth (ed.), pp.119-147 London; New York: Tavistock Publications.

Einzig, Paul

1966 *Primitive Money*, 2nd edition. London: Pergamon Press.

Epstein, A. L.

1963 Tambu: A Primitive Shell Money. *Discovery* 24: 28-32.

1969 *Matupit: Land, Politics, and Change among the Tolai of New Britain*. Berkeley: University of California Press.

1979 Tambu: The Shell Money of the Tolai. In *Fantasy and Symbol*. R. H. Hook (ed.), pp.149-205. London; New York: Academic Press.

Epstein, T. S.

1968 *Capitalism, Primitive and Modern*. Canberra: Australian National University Press.

Errington, Frederick and Deborah Gewertz.

1995 *Articulating Change in the "Last Unknown."* Boulder: Westview Press.

深田 淳太郎

2002 『人類学における貨幣理論をめぐって：ニューブリテン島東部 Tolai 社会における伝統貨幣 tambu を事例に』 2001年度一橋大学大学院社会学研究科提出修士論文。

Kleintitschen, P. A.

1906 *Die Kustenbewohner der Gazellehalbinsel*. Hiltrup: Herz Jesu Missionshaus.

湖中 真哉

2005 「地域通貨はなぜ使われないか：静岡県清水駅前銀座商店街の事例」 『国際関係・比較文化研究』 3(2): 33-58。

小坂 恵敬

2002 『パプアニューギニア、トーライ社会における近代と伝統の「接合」：貝貨銀行を巡る冒険』 2001年度三重大学大学院人文社会科学研究科提出修士論文。

2003 「貝貨タブの可能性：パプアニューギニア・東ニューブリテン州の貝貨銀行」 『日本オセアニア学会ニューズレター』 77: 1-9。

Neumann, Klaus

1992 *Not the Way it Really Was: Constructing the Tolai Past*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Parkinson, R.

1887 *Im Bismarck-Archipel*. Leipzig: F. A. Brockhaus.

Parry, Jonathan and Maurice Bloch

1989 Introduction: Money and the Morality of Exchange. In *Money and the Morality*

of Exchange. Parry, Jonathan and Maurice Bloch (eds.), pp.1-32 Cambridge:
Cambridge University Press.

Salisbury, R. F.

1970 *Vunamami*. Berkeley: University of California Press.

参照資料

< 政府資料 >

East New Britain Provincial Administration

2003 *Terms of Reference for the Tabu Research Project (Second Phase)*.

Papua New Guinea National Statistical Office

1997 *Consumer Price Index*. (December Quarter 1997)

2002 *PNG 2000 Census – Table Retrieval System*. (CD-ROM)

2003 *Consumer Price Index*. (September Quarter 2003)

< 新聞 >

Post Courier

1999a “East New Britain Province may approve traditional shell money as legal tender.” November 16.

1999b “East New Britain shell money to become legal tender.” November 26.

2002a “Pay fees with shell money.” January 22.

2002b “Rabaul exchange is open for shell money.” February 13.

2004 “To rise from the ashes.” September 21.

The Independent

2000 “East New Britain shell money to be legalized.” July 20.

< インターネット上に存在する資料 > いずれも 2005 年 9 月 7 日にアクセス確認

DeMeulenaue, Stephen

2002 The valuation and Production of Tabu Shell Currency. URL: http://www.appropriate-economics.org/asia/png/Making_Tabu_Shell_Currency.pdf

DeMeulenaue, Stephen (ed.)

1995-2002 *Articles on Tabu Traditional Shell Currency*. Local Exchange Systems in Asia, Africa and Latin America. URL: http://www.appropriate-economics.org/asia/png/Articles_on_Tabu_Traditional_Shell_Currency.pdf

Radio Australia

2002 *Counting Shells at a New Bank in Papua New Guinea*. Radio Australia. Pacific

Beat. Melbourne, Australia. URL: <http://166.122.164.43/archive/2002/March/03-01-09.htm>